
底なし

森かえで

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

底なし

【Nコード】

N8565A

【作者名】

森かえで

【あらすじ】

ある女の子の現実逃避。そのあと現実に戻ってくる話。失恋話で、同性愛要素があります。

喧騒が煩わしかった。人の波を抜け、木々の乱立した暗闇へと向かう。綿飴を持った子供や家族連れが少なくなつて、カップルだけがやたらと目につくようになる。

やはり浴衣なんて着るものではないな、なんてため息をついてみるが、私は一人きりだった。

一人きりで花火を見に来るというのも、初めての経験だった。ついでにいうと祭の日に浴衣を来たのも初めてだった。子供の時分にさえ断固として着なかつた。妙にすかすかした着心地が女という役を強要しているようで、苦手だったのである。

まだ就職もしてらっしゃらないでしょう、あなた程の年齢なら、これなんていかがでしょうか。肌が白いし、よくお似合いになると思いますよ。

桜の色が、闇の中にかすかに浮かぶ。私の目の中にゆっくりと、しかし確実に迫ってくる。

迫ってくる、現実世界の記憶とともに。

那須貴子はいなくなつてしまった。いや、実際にはいつでも会えるし、毎日会いに来てくれているのだ。十八時の地下鉄を待つ私のもとへ。かつかつ、ヒールの音を響かせて。

彼女と顔を合わせたくない私にとつて、それは限り無く重たい音に聞こえた。そして、そんな音さえ愛しく思う自分に反吐が出そうだった。眠りにつくまで、近づく足音を反芻していた。彼女の足音だけが世界を動かしているようだった。

振り切りたくてここへ来た。JRを一駅先に降りてバスでひたすら北へ向かい、ふと見た先に祭の明りがあった。持ち合わせた金を全てはたいて浴衣を買った。

やはり、浴衣など着るべきではなかつた。

女という自覚を促してみても、そしてそれを認識したとしても、

この感情はどこまでもまとわりついてくるのがわかったのだ。

むしろ祭の熱が私の恋情に影響し、ほてった気持ちか体の隅々まで渦巻くようだった。現実から逃げられても、この精神世界だけにはずっと囚われているしかないのだ。

耳鳴りのように、ヒールが響く。熱がじんじん目鼻に響く。

なんて馬鹿なのだろう。現実はどうにも出来ないのに、彼女からだつてちゃんと言葉にされたし、自分でもわかっているというのに。しばらく涙を垂れた後に、祭が周りに戻ってきた。盆踊りの音楽や迷子のアナウンス、ソースの匂い。徐々にカップルのささやき声や、私の様子を心配する女の子の声も感じるようになった。

やぶ蚊が耳の周りであつていて。叩くと、浴衣の上だった。桜色に赤がにじんだ。歩き始めると花火が鳴って、木々の間にまた赤がにじんだ。

赤い世界。そのあと闇が静かに戻ってくる。

くらくらする。足が草の中に深くどこまでも沈んでいく。

戻るべき場所はわかった、あの地下鉄二番ホームである。彼女の望むぬるく柔らかい関係にはなれない。しかし私は私で、こんな赤と黒の世界を生きていよう。

でもはつきり覚えたのはそれだけで、あとは赤と黒に明滅する世界で意識すら定まることはなかった。

(後書き)

暗いなあ…；よろしければ評価をしていって下さい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8565a/>

底なし

2011年1月20日00時51分発行